
御魂に宿るものは終えず

御紋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御魂に宿るものは終えず

【著者名】

20955Q

【作者略】 御紋

【あらすじ】

2010年8月1日の物語り。さあ、ゆっくりゆっくりこの道をおいで。私の歩みは止まつても、私の子供たちの歩みはまだ続いているのだから。 今でもおまえたちを愛しているよ。

おばあちゃん視点で原作半ばからその直後まで。

句読点のみをいじつてサイトから転載。

サマ ウォーズ好きに捧げます。

【原作ネタばれOKの方推奨作品となります】

※神格化主義者のサイト企画作品でした。

【 1 - 【 (前書き)

いわば筆者のサイトの企画で発生した作品を可読点をこじる程度の修正をしただけのものです。

【 1 】

おかしなものだと笑つてあげようか。
けれど、たしかに覚悟はあつたから。
悔みはしないよ。

「階で、1J飯を食べましょうか」

そう言つたのは私の長女。

女系一族だと言われる中で、私の跡を継ぐことを誰よりも意識していた。

子。

「大丈夫だ」と告げてあげれば笑みを浮かべた。

これからは自分で顔を上げていけるね?

「了平、ふあいとーー！」
「由美さん、こつちーー。」
「あーん、まだ試合終わってないのに～～」
「ドタバタドタバタ。」

ふふふ、駄目でしょう廊下は走っちゃいけません。
埃がたつでしょう。ましてや、アナタ達は皆で食べるものを持つて
いるのだから。

ああ、でもそうね。

もうこの声は届かないのね。

理香、直美、典子さん、由美さん、加奈さん。

私の大切な家族。

私の認めた女たち。

優しく強く、男たちを支えて子供たちを護つてくれるの
でしょう？

「ばあちゃん、ただいま…」

ああ、お帰り。私の愛しい子供。
待つていたよ、待つていた。
いつか帰つてきてくれる。
この家があ前の還る場所だ。

私は、お前を生んではあげることは出来なかつたけれど。
間違えることなく、私はお前を育てた母だつた。
いいかい、幸せな子。

お前は、一人の母を持つ、幸せな陣内家の一員であつたんだよ。
いつか思い出して、お前の名は侘介。
人と家をつなぐ文字をその身に持つ者なのだから。

「大変じやない！」

「ああ、追い詰められてる
食べてる場合なの！？」

「遺言だからな」

「敵は圧倒的なんでしょう！？」

「慶弔式十年の大坂夏の陣じゃ徳川十五万の大軍勢に打つて出た」
「でも、負けたんじゃ…」

「こういふのは勝ちそつだから戦うとか負けそつだから戦わないと
かじやないんだよ。負け戦だつて戦うんだよ、ウチはな」

「馬鹿な家族！」

「そう、わたしたちはその子孫」

「たしかに、あたしもその馬鹿の一人だわ」

ふふふ。

可愛い子たち。

そうね。馬鹿かもしれないけど、私には愛しい子たちだよ?
だって、誰よりも真っ正直でまつすぐで 人を護るつ
と足掻き続けている。
それは間違いない。

陣内家の人の間である証だ。

。

「いけええええーー！」

…叫んでいるのは誰だい？

「夏希つ、やれえええーーー！」

頼彦？ 邦彦？ 克彦？

おやおや、懐かしいこと。おまえたちがそんなに必死に叫んでい
るのは、…高校時代以来かい？

部活に忙しい割に私のもとへ顔を出してた子供たちが、いつのま
にか親になつて。

抱きしめる子供たちが愛しいのだと告げてきたのはいつのこ

とだったか。

護つておいか。

それが、お前たちの家族だから。

「やつちまえ！……」

…これ、はしたないよ。
女の子はもう少し上品な言葉をお使ひつて言つただひつへ。
理香、直美、万里子まで。
まったく、誰に似たんだかねえ。
若い頃に薙刀振りまわしてた私に似たんだったから、ビリijoじょうも
ないかね。

「先輩、いけます！」

「ぶちまかせつ！」

「うおおおおおおおおおおー！」

…おやま。

なんだい、何かしてたのかい？

おや、あれは花札じゃないか。

なんだい、皆して好きだねえ。

最近は忙しくて花札の相手もしてもらえなかつたんだ、あたしの

相手も今度はしておくれよ？

何、急がなくていいよ、私の時間はゆっくりとあるんだから。
生は有限、死は無限。

ゆっくりでいいから、生きてからおいでの

それが私の願いだ。

。

…わんわんわんわん。

おや、また途切れていった。

仕方ないかねえ、なにしろこんなことは初めてだ。
死んだなりの魂だ、まだまだ人生初めての経験つて言うのはある
んだねえ。

まあ、死んだ後も人生なんていいはしないんだろうけども。

「ええっ！…！？」

つて、なんだい。

聞こえたのかい？ 私の言葉。

ああ、違う。なんだか、みんな大きなＴＶを見てるよ。
よく分からぬが、電子機器と魂つていうのは相性が悪いのかね。
何が書いてあるのかとんとわかりやしないよ。

まあ、生きてても新しいものに追い付くのはそろそろ難しかった
のが本音だがね。

「（）にあらわしを落とす気？」

「それ以外の何がある！…」

「ふざけんな、あの野郎お！」

「まだ解体は終わらないの？」

「やつてる！」

【十分を切った！】

おや？ 知らない少年の声だ。
だが必死だね。

おまえさんも守ってくれてるんだねえ。なんてありがたい
ことだろ？。

「もう注意の「コース修正は無理だ」

「冷静に。まずは退避！ 近所の人たちに報せを！ どんな被害が
出るかわからん！ 行くぞ！」

なんだろうね、避難だつて。

裏山にあつた防空壕だつたら、もう潰しちゃつたよ？
いまだきの兵隊さんはそんなもんじや間に合わない武器を使つら
しいからねえ。

…かたかたかたかた。

…おや？

なんだろう、一つの音が聞こえるよ。

…かたかたかた。

「佐久間！ 管理棟に奴のログは残つてゐる？」

【お、ああ】

…かたかたかたかた。

ぱたりと落ちる汗。

：何も言わずに仕事をするんだねえ。

避難に急ぐ子供たちを背後に、解体作業とやらをしてるじー

人の子供を見た。

ふふふ。

やつぱり、お前も陣内家のの人間なんだね。
もしも、いま肉体があつたなら。

お前の頭を撫でてあげようね。

他の子供たちにしてあげたように。

よく頑張ったねと声をかけてあげたいよ。

：いい子だね、侘介。

「まだ何かする気？」

「……」

ああ、聞こえない。

またかい、全くもつて面倒なもんだ。
次は何で目覚めるのやう。

がたん。

墜ちた。
いや、痛くはないんだけど、もひゅうっと丁寧に扱ってくれ
ないかい?

口を酸っぱくして、御先祖さまは丁寧に扱つよひつて教えたは
ずなんだがね。

「 . . . 」

がら...

「 温泉だ」

「 温泉だ」

「 温泉がでたああああああ

ん?

なんのことだらう?

と。

。 . .

何があつたんだろう、これは。

我が家敷地内から噴出しているあれは、どう見ても立派な温泉

だつた。

…こんな日がくるとはねえ。

「あら……生きてる、わ」

万里子。

呆けた表情でいいなさんなよ、そんなに簡単に娘と再会してたまるかい。

「みんな、大丈夫か？」

「けがはしてねえか？」

万作、万助。

おやおや、いい年寄りが若者をかばつたのかい？

なんともいい男に育つたもんだ、ウチの子は。

老けたも若いも関係なく、守れる男がいい男なのさ。ウチの家系はね。

「おーい、みんな大丈夫かー」

「じゃあ、おれ近所みてまわつてくるわ」

「俺、仕事場行つて人手借りてくれる…」

忙しないねえ、おまえたち。

体力自慢の若人は、さつさと仕事をしておくれ。

まあ、言われなくともしてるみたいだけども。

ふふふ。

かたん…。

「…よかつた、大丈夫だったか
ばあちゃん。

本当に、この子は…。

ええ、ええ。大丈夫でしたよ。
お前も大丈夫でよかつた、侘介。
一番に、私に気付いてくれた子供。

「ばあちゃん！ 今助けるからな」

翔太。

もう『私』でなくなつた方の身体を大事に考えてる思春期の孫を、
どうすればいいものかと考える。
死んでしまつたモノは、もう物にしかなれない。
死者は、生者の輪から外される。
それが過去からの共通認識。

いつかわかるだろうか。

…いい嫁さんを探してくれればいいんだが、

ふう。

「…いら、いいかげんに戻つておいで」
「…はーい」

爆風で散乱した我が家には、危険なモノが一杯散乱していくよつだ。

壊れた障子や陶器の欠片。

素足で歩くのは危険だよ。

ついひりと歩き始めた子供たちを呼びもどしたのは直美だ。

…子供を得ることなく、離婚を選択した私の大事な家族。泣きながら、瘦せてしまった身体で「ごめんなさい」と言いつてきた事を忘れない。

辛かつたねえ。

「せめて、スリッパくらい履きなさい。ほら、行くよ
皆の分も持つてくれる!」

「はーい」「

意外にも、直美は子供たちから好かれている。

先導する直美のあとを子供たちは素直について行つた。

可愛い隊列だこと。くすくす。

「ふざつけんなー！ ウチの修理費は誰がだしてくれんのよーーー！」

ぶるぶると震えながら電卓を探し出したのは、理香だ。

現実的？

まあ長女だから、しつかりとしたもんだ。

その指先は怖ろしい早さで動いている。

・佳主馬のタイピングもかくやというところだらうか。

職業女性、というのは凄いもんだ。

「姉ちゃん、天災じゃないからなんとかなるさ」

持ち込んできたんだろう、仕事場の機器類の様子を確かめていた

理一が笑顔で言った。

おまえは、誰に似たのかねえ。

笑顔の裏で、あてのある先に押し付けよつとかたくらんでいそくな本家の長男がすごく不思議だつた。

うーん、似てるのはあの人よりもその弟だね。

県議会に勤めるまでいつた彼も、あんな笑顔でいろいろとしてくれた。

そう、いろいろと。

笑顔が彼の自己防衛なんだろうと理解できたのは嫁いで何年たつてからだつたか。

笑顔の下で苦しんでるとき、手を差し伸べてくれる女性が出来るので待つていろよ。

【 5 】

「健一さん…」

「健一くん！」

おや?

一人だけ、まだ目覚めてない子がいるようだ。

「あらあら。どうしたのかしら」

「ふむ、ちょっと診てみるか」

よいしょ。

万作が腰を上げて、健一さんの様子をうかがい始めた。脈をとつて、眼を見て、手足をさすつて、表情を見て。

「…ふむ、なんともない」

脳しんとうというよりは疲労だな。疲れてたんだろう。

「……。あれだけすうじごとしてくれたんです。休ませてあげるのが一番ですよ」

ヒーロー、ですかねえ。

万作と太助だった。

よく寝てる。
鼻血はだれかが拭つてあげたようだ。
焦った表情で夏希と佳主馬がその身体をゆするうとしていたのを、

万作が止めていた。

【 みなさん、大丈夫ですかー 】

聞き慣れない少年の声が、皆に声をかけていた。

「ああ、大丈夫だったよ、おかげさまでね」
佐久間くんにも本当にお世話になつたねえ。

太助が、大きな画面から話しかけてきた少年へ返答していた。

【 健一は電池切れましたか。 脳内あんだけ一氣につかえればねえ
】

仕方ない仕方ない。

よくあることだといつよつに、言葉を繋げる少年の声には安堵が
潜んでいた。

【 とりあえず。しばらくON関連のほうは俺が様子みでますよ
御希望なら、使いつぱもしますよ? 】

「今のところは特にないかなあ」

残っている男たちに目線で了解を得てから、太助が答えていた。

【 了解です! 】

「 佐久間くん、キミも寝ていいんだよ? 」

ここにとどく、ろくな寝れてないだろう?
協力してくれた少年の身体が少し揺れている。

【若いから、大丈夫ですよ！】

「それをいわれると…」

苦笑いする太助。

「若さを過信しないで。落ち着いてからでもいいから、食事を摑つて休みなさい」

今は興奮して寝付けないのも分かるがね。
理一は、そう諭した。

【…はい】

今度は少年が苦笑いする番だ。

ぱたぱた。

「離れる方がまだ綺麗よ。お布団敷いたから、連れてきてあげてくれる？」

聖美の声に男たちは腰を上げる。

失神したままの、我が家ヒーローどのを休ませるために。

ありがとうございます。

小磯健一。

夏希が連れてきた、偽の婚約者。

- - - 僕は…、まだ駄目なんです。

自信なさげに咳いた少年。

大丈夫、大丈夫。

まだまだ未来は残っている。

足搔く少年にはまだわからない。

一つ一つになすことでしか得られないものがあるのだと。

あきらめたら終わりなんです。

そう語った少年の声を、魂のまじりみの中で聞いた。
それを知っているおまえさんなら、大丈夫だ。

健一さんなら出来るよ。

言つたろ？、おまえさんは立派な陣内家の新しい家族だつて。

「かあさん、お葬式ー！」
「どうしようつーーー！」

「ああ、…もういいわ」

野外でしましょつ。

晴れ渡る空を眺めながら、万里子が言つた。

「は…。……………そうね、そつしつけやつか」
あつけにとられた後で理香が笑い。

「……………つく」

理一が引きつけるように笑つて。

「よーし、じゃあ俺はイカ焼くか！」

「……………バーベキューでもしますか」

万助はにかつと笑い、太助は父親の行動にただそう述べた。

「了平兄ちゃん、勝つたよー」

「勝つた」

「優勝したよー」

報告してきた子供らの声。

遠くで喜ぶ由美さんの声が聞こえた。

あ、頑張ったね。了平。

誕生日には優勝旗を持つて帰ると言ってくれた曾孫の一人を思つ。

泣くだろうけど。

いまだに私の死を知らされていないあの子は。
感情がすぐに顔に出るア平。

今でも待つているよ、優勝旗。

お誕生日にプレゼントするんだ！

そう言ってくれたあの子に。

頑張ったね、と誰かに代わりに伝えてほしい。
きっと、それは誰もがいうのだろうけれど。

おかげり、それからおめでとう。

「よし、よくやったーー！」

「やるねえ」

ここにこと笑顔でみなが笑っていた。

「じゃあ、行つてくれるわ」
県警まで。

そう言つた後、侘介は出ていった。

「翔太、連れてけ」

おまえの職場だろうが。

一本だけ連絡をいれたあと、がたがたの車に乗つていった。

： 行つてらっしゃい。

今度は、早く戻つておいでよ？

夏の日差しが熱いのか。

みな汗をかいていた。

私はそんなことはないがねえ。

なにしろ、魂だけの存在だ。

見える風景はとても美しかつたよ。
すべてが。

愛しい、私の夏。

。

【 7 】

はっぴバースデイ、トウ、ユ~。

「 「 「 「 90歳のお誕生日おめでたひ、おばあちゃんーー。」

「 「 「

私の両隣りには、世話をしていたアサガオの鉢植え。
綺麗に今年も咲いてくれて何よりだ。

呆然と見守る参列者には申し訳ないが。
私は幸せだよ。

涙の葬式より、笑顔の誕生日の方がいい。

「さあ、食え食え！」
いい色に焼けたイカ。
食べたいね。

歯が立たなくなつて食べれなくなつて、どれだけたつてたと思う
んだい？

食べへの関心はそれなりにあるんだよ。

豪快に泣いているのは、報せを聞いてすぐに帰ってきたア平かい。ありがとう、約束通り持ち帰ってくれたんだね。優勝旗。

仲間たちより先に帰ってきたんだろう、ユニフォームのままのひ孫にお礼を言った。

「う、動いた！」

聖美のお腹に手を当てて、ビックリしているのは佳主馬。本当に、あれは命の神祕だよ。自分の中に一つの命がいることを不思議に思ったものだ。いいお兄ちゃんになつておあげ。きっと、なつてくれるだらうけど。

さあ、いいかげんに少し休もうか。

私を置いて先に逝ってしまった、困った夫が迎えに来るのを此処で待とう。

私が生きた、この家で。

了 b y 御紋

人が亡くなつたあと、魂は何処にあるのかそんなことはいいで
詮議する気はありません。

遺影に宿つたおばあちゃんの魂は、ただいまお休み期間。
49日には新しい旅路を辿るのでしょうか。

あるいは魂は分解されて世界へ循環するという説もありますが。

最後に、笑顔であつた遺影に救われました。

私なりのおばあちゃん視点での物語りはいかがでしたでしょうか。
皆様のなかのおばあちゃんに相似するところがありましたら幸い
です。

捏造視点の物語りへのお付き合い、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0955q/>

御魂に宿るものは終えず

2011年1月16日11時55分発行